

令和 7 年 7 月 11 日(金)付

デジタル人材の育成と確保につなげようと、出雲市が、出雲科学館(出雲市今市町)内に育成拠点「いずもデジタルスタジオ(仮称)」を整備する。市内のIT企業や島根県立大と連携し、学習や人材交流ができる講座などを開く。幅広い世代にデジタル技術への理解を深めてもらい、社会人のリスキリング(学び直し)の機会も提供する。11月のオープンを目指す。

スタジオでは、高校生を主な対象とし、プログラミングやデザインツール、仮想現実(VR)などの講座を開講。市内のIT企業の社員による講座も想定し、業務で使う技術を学べる機会を設ける。

eスポーツやスマホ教室も開き、小学生からシニア層まで幅広い層を対象にデジタル技術に親しみをもってもらう。会社員らを対象にリスキリングの機会も提供する。

市は、テック(IT)企業が集まり、国内外の人材や企業とつながるハブ(中心地)を目指す「テックハブ出雲」を掲げており、2020〜24年度の新規立地は

出雲でデジタル人材育成

科学館に拠点、11月開設へ

11件、事業拡張は6件となっている。

一方、島根県情報産業協会が24



いずもデジタルスタジオを整備する予定のスペース。出雲市今市町、出雲科学館

プログラミングやVR講座 企業、大学と連携 学習や交流

年にまとめた調査によると、市内のIT関連企業13社のうち約7割の9社が人材不足感があると回答。県内全体でも同じ傾向にあり、外部から人材を誘致するだけでなく、地元で人材を育成するために拠点を整備する。

スタジオは同館2階の一角(約80平方メートル)に整備し、パソコン10台を設置し、スタッフが常駐する。市は25年度一般会計補正予算に関連経費880万円を計上。財源は、国の交付金440万円、コンピュータ機器製造販売会社からの企業版ふるさと納税の寄付金400万円を活用した。8月までにプロポーザル方式で運営事業者を決める。

市産業政策課の原靖弘課長は「人材不足が慢性的に続いており、地元の人からも育てたい。デジタル知識を学べる機会を提供し、デジタル化を進めていく」と話した。

(片山皓平)

談論

風発

814

島根県立大学学長

山下 一也

右手のしびれが教えてくれたこと



やました・かずや 医学博士、専門分野は神経内科、神経心理学。島根医科大学医学部卒業後、1991年にカリフォルニア大デービス校神経科研究員として留学。94年から津和野共存病院院長、その後、島根県立大出雲キャンパス副学長などを経て、2023年4月から島根県立大理事長・学長。

神経内科医として、多くの「しびれ」に向き合ってきた。しかし、まさか自分自身がその患者になるとは思わなかった。右手のしびれの診断は「ストレートネック」。スマートフォンをのぞき込む姿勢が、私の首の自然な湾曲を奪っていた。

この経験は、単なる身体症状にとどまらなかった。交流サイト(SNS)から距離を置き、スマホ使用を控えたある日、静けさの中でふと紙の本を開いたときの感覚、ページをめくる指先の動き、本の匂いが五感を刺激し、忘れていた思考のリズムがよみがえってくるのを感じた。

もちろん、技術の恩恵を否定するつもりはない。人工知能(AI)による画像診断の精度向上、遠隔診療の導入によって、山陰地方の中山間地域や離島に住む方々も、専門医の診察を受けやすくなった。この進歩は、地方に暮らす者にとって確かな恩恵である。

しかし同時に、私たちは技術に思考の主導権まで委ねていないか。スマホが手元にある続ける生活は、判断を機械に委ね、注意力を奪い、私たち自身の思考をむしろぼんやりさせているのではないか。

神経科学では、長時間のスクリーン注視が脳の注意・視覚回路に与える影響が指摘されている。実際、教育先進国でも見直しが進む。フィンランドでは2024年秋、一部の学校で紙の教科書への復帰が始まり、スウェーデン政府は「子どもには教科書が必要だ」と明言し、読書と手書きを重視する教育政策へかじを切った。子どもたちにとって最も重要なのは情報量ではなく、思考の深さだという教育哲学が、今、再び注目されているのだ。

デジタルとアナログ 融合の工夫を

こうした動きは、思考力の回復にはアナログな「余白」が必要であるという認識の広がりを見せている。

山陰地方でも光景が変わった。かつて高校生が集っていた街の書店が次々と閉店し、コンビニの周りでスマホを使っている姿が増えた。大学の食堂でも、食事中にスマホを操作する学生たちの姿が日常となり、静かな沈黙が支配する光景に違和感を覚えることがある。

ただし、若い世代を一方的に批判する気にはなれない。彼らは複数の画面を同時に開き、情報を即座に取捨選択し、短い言葉で要点を伝えるという、私たちとは異なる思考様式を育んでいる。スマホは単なる情報端末ではなく、彼らにとっての「知性の場」でもあるのだ。

だからこそ、求められるのは二項対立ではなく「融合」の知恵である。従来の沈黙思考する力と現代の情報処理能力。そのどちらかを否定するのではなく、両立させる教育的・社会的な工夫が必要となってくる。

例えば、家庭でもできる取り組みがある。食卓ではスマホを脇に置き、家族で「最近読んだ本」について話してみる。週末には親子で図書館に足を運び、静けさに身を置いてみる。こうした習慣が、思考に必要な余白を取り戻す第一歩になるだろう。

私の右手のしびれは、単なる神経症状ではなかった。気付けば、思考までもがしびれていたのかもしれない。スマホを置き、ページをめくる。その動作が、思考のリハビリになっていた。デジタルに囲まれた今だからこそ、私たちは静けさの中で、立ち止まり、考える時間を意識的に確保する必要があるのではないか。